文壇手帖

近代作家
研究叢書

57

近代作家研究叢書67

監修／吉田精一

文壇手帖

笹本　寅著

解説／中島河太郎

日本図書センター

近代作家研究叢書67　監修・吉田精一

文壇手帖

1989年10月15日印刷
1989年10月25日発行

著　者　笹本　寅

解説者　中島河太郎

発行者　髙野義夫

印刷所　モリモト印刷株式会社

製本所　有限会社東明製本

発行所　株式会社日本図書センター
東京都文京区大塚3－4－13
電話03(947)9387　振替東京2-8206

落丁・乱丁本はおとりかえします。　**定価6,695円**(本体6,500円)

ISBN4-8205-9020-0 C1395 P6695E

目次

大衆作家・世に出るまで……三

大佛次郎の巻……四

大衆文學運動の前衞　投書家時代の「一高ロマンス」　大佛次郎の外務省時代　明察の伯爵鈴木貫太郎　「鞍馬天狗」が世に出るまで　三十餘りのペンネーム

白井喬二の巻……一一

「娯樂雜誌愛すべし」　大衆といふ言葉の意味　白井喬二と「講談雜誌」　記念すべき大正十三年　廿一日會と「大衆文藝」　貴重なる文獻「國史挿話全集」

吉川英治の巻……一八

吉川英治と故大藤治郎　谷孫六の勸めで處女作を毎夕へ　震災直後、牛めし屋を開業　北信角間で後圖を計る　問題を起した「劍魔俠菩薩」　乘るかそるかが三萬餘圓の邸宅

三上於菟吉の巻……二六

自費出版の「春光の下に」　英佛古典作品を「醫もの」に飜案　十年間は「現代もの」に專心　白鳥の傑作、彼を大衆畑に走らす

直木三十五の巻……三一

直木三十五の月謝未納問題　内ヶ崎教授を激怒させる　損な働きをした美術記者時代　書肆春秋社を創設するまで　雜誌「主潮」と「人間」と　家賃滯納一年半借金取をなぐる　「文藝春秋」創刊のころ　字が禍ひして講談社に落第　「特作映畫」を最初につくる　「南國大平記」で一躍人氣作家に

土師清二の巻……四一

土師清二のでつち奉公　「新文壇」に投書した頃　萬朝報懸賞に三回當選する　「週間アサヒ」が創刊されるまで　「週間アサヒ」に處女作を發表　男をあげた「砂繪呪縛」

長谷川伸の巻……五三

指をつぶしたルンペン時代　牛に逐られて淋しく入營　「殘飯上等兵」長谷川伸二郎　青々園の世話で都新聞へ入社　「サンデー毎日」に穴埋めの新講談　「長谷川伸」の名付親菊池寛　「意地の强さも度胸のよさも」　共同製作の同盟名古屋の「耽綺社」

村松梢風の巻……六三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大門を出たのは一年に三日だけ　中央公論社に原稿を持込む　「他の雜誌には書くべからず」　諸作家を育てた編輯者瀧田樗蔭　雜誌「驚人」を發行するまで　一萬部刷つて八千部の返品

邦枝完二の巻……七〇

死んだ勝精伯はボールの好敵手　病中に讀んだ春水の「梅暦」　「荷風」ならでは夜も日も明けず　時事へ入社して運動記者となる　同僚菊池寛と千疋屋へ日參　時事新報から帝劇文藝部へ

佐々木味津三の巻……七六

歴史小説を「苦樂」にかく　痩せても枯れても「髷もの」はかゝぬ　十人の子供達を扶養するために　置時計を貰つた「風雲天滿双紙」

子母澤寛の巻……八三

二百枚十圓の赤本をかせぐ　上野圖書館に朝から晩まで　材木問屋の番頭となる　ざぶとんを燒芋に代へて　尾佐竹の馬鹿に猛然と立ち上る　「流行兒」近藤勇、子母澤寛を作る

人と生活

中里介山・人と生活……九二
直木三十五・人と生活……一〇七
中村武羅夫・人と生活……一二四

作家訪問記

谷崎潤一郎氏訪問記……一三九
志賀直哉氏訪問記……一四〇
デコブラ訪問記……一五〇
東京滯在のバアナアド・ショウ……一六一

一問一答錄

……一七四

木村毅氏との一問一答……一九〇
横光利一氏との一問一答……二〇一
辰野九紫氏との一問一答……二〇七
龍膽寺雄氏との一問一答……二一三
杉山平助氏との一問一答……二一九
大正昭和文壇闘爭史……二三七
女流作家・世に出るまで……二七一
長谷川時雨――平塚らいてう――ささきふさ――中條百合子――岡本かの子――圓地文子――北川千代――松田解子――矢田津世子――平林たい子――平林英子――鷹野つぎ――富本一枝――小寺菊子――眞杉靜枝――吉屋信子――與謝野晶子――

深尾須磨子——池田鑛子——横山美智子——宇野千代——林芙美子——太田洋子
——今井邦子——中河幹子——生田花世——神近市子——窪川いね子——野上彌生
子
時事新報退散記
後記

文壇手帖

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

大衆作家・世に出るまで

「文壇鄉土誌」（大衆文學篇）

大佛次郎の卷

大衆文學運動の前衛

たゞ古い材料を新しい人間がかいたといふだけで、髷もの、つまり時代ものが、「新講談」と呼ばれてゐた時代から、堂々と「大衆文學」の存在を示し、今日の隆盛を見るやうになつたその黎明を拓いたのは、白井喬二と大佛次郎である。(この意味では、中里介山の「大菩薩峠」を見のがすわけには行かないが、「大菩薩峠」の著者は、その著作を「大衆文學」として取扱はれることを極端に嫌つてゐるので、これは割愛することにする。)

大佛次郎は、明治三十年十月、野尻政助氏の三男として横濱に生れたが、政助氏は和歌をよくし、その熱心な投書家であつた。そして、一昨年八十九歳の高齢をもつて歿するまで、最もよき大佛次郎のファンであつた。親孝行な彼にとつて、この父の存在は、その文學的情熱の一つの大きな拍車であつたに違ひない。

投書家時代の「一高ロマンス」

また、大佛次郎の文學的大成の蔭に、英文學者として有名な長兄野尻抱影のあつたことも忘れてはならない。彼が少年の頃、彼の一家が、江戸川べりの東五軒町に住んでゐたことがあつた。その頃、彼の家の隣に、紅葉門家で當時鳴らしてゐた柳川春葉が住んでゐた。抱影の同窓でかつ親友である相馬御風が、よく彼の家を訪れ、彼をおぶつて神樂坂を散歩したのも、この東五軒町時代だつた。芝居が好きで當時久留嶋武彦氏等の提唱で世に行はれてゐたお伽芝居に出演し、そのために刀まで持ち出されてお母さんにおどかされたといふほど、藝術的な芽生えを持つてゐた彼が、どんなにその藝術的な環境に刺戟を受けたかといふことは想像される。

彼は、一中から一高に進んだ。一高時代には、彼は投書家として鳴らしてゐた。博文館から發行されて當時大きな勢力だつた「中學世界」に草雄といふペンネームで、「一高ロマンス」をかいたのは彼である。この一高の學生々活をかいた「一高ロマンス」は、非常な評判になつた。あとで單行本として出版されてからも、この本はどん〳〵賣れた。彼の一高時代は、新しい帽子

をわざと破つてかぶるといつた風の、バンカラの多かつた學生の中で、頗るハイカラだつた。そのスマートな身だしなみは、端麗な容貌と相俟つて、いかにも貴公子然としてバンカラ連中のなかに異彩を放つてゐた。このことは、後年文學者としての彼の作風と思ひ合せて、微笑をもつて考へられることである。

大佛次郎の外務省時代

大佛次郎は、一高から帝大に進み、帝大では志と違ふ政治科を選んだ。これは、父の彼を役人に仕立てようといふ希望に從順であつたためである。

だが、殆ど學校の勉强はしなかつた。こゝろは、ひたすら藝術方面にのみ動いてゐた。この時分、仲間を語らつて、「テアトル・ドウ・ビジュウ」といふ劇團をつくり、有樂座で自ら舞臺にのぼり、大入滿員の盛況だつたといふことなどは、いまなほ彼の無邪氣な自慢話である。また、この帝大時代に有嶋武郎のところへ出入りしてゐたこともある。大學卒業後、菅忠雄の紹介でわすかの間鎌倉女學校で歷史と國語の教鞭をとつてゐたことは、わりに多くの人に知られてゐるが、こ

の時に前後して、彼は多くの飜譯に手をそめた。ロマン・ロランのもの其他、叢文閣や新潮社から出版したものだけで、五、六冊はある。

大正十年から十二年までの、外務省條約局勤務時代は、意味深き三年間だつた。外交官としての將來を、先輩から期待されながらも彼は、文學的精進に熱心なのに反比例して、役所は怠け勝ちだつた。當時、博文館から出てゐた探偵もの專門の雜誌「新趣味」に、アンリ・レエニネをもちつた安里禮次郎や八木春泥の名で、飜譯や飜案ものを寄稿してゐたのも、この頃だつた。また菅忠雄などと同人雜誌「潛在」を發行したこともあるが、これは二、三號しかつゞかなかつた。

明察の伯樂鈴木德太郎

今の伊東町長で時の「新趣味」主筆だつた鈴木德太郎は、つとに彼の學識と才能に眼をつけてゐた。大佛次郎といふ駿馬を見出すためには、鈴木は實にすばらしい伯樂だつたのである。――「新趣味」に立てこもつてゐた頃の大佛次郎は、めちやくちやに讀み、またかいてゐた。ところが、あの大震災に見舞はれて、「新趣味」は廢刊の憂目をみた。そして、鈴木は、今度は「ポケツ

ト」の主筆に轉じて來た。「新趣味」が外國ものゝ飜譯が主であつたのに反して、「ポケット」は世にいふところの大衆雜誌だつた。鈴木にとつては、このことは全く勝手の違つたことだつた。大いに面喰つた彼の胸中に浮んだのは、何よりも安里禮次郎の名であり、八木春泥の存在だつたのである。彼は思つた。——この人ならば何とかしてくれるだらう、と。そして、彼は、取あえず、安里禮次郎、後の大佛次郎の門をたゝいたのである。

「鞍馬天狗」が世に出るまで

大佛次郎のところにかけつけて來た鈴木德太郎は、「今度自分が『ポケット』を引受けることになつたから、是非面ものをかいて貰ひたい」と申出でた。しかし、その頃、大佛次郎は、ちよんまげのちよの字も知らなかつた。これは、今の大佛次郎からみれば嘘のやうな話である。だから、彼は、鈴木の申し出に對して躊躇した。しかし鈴木は、「あなたが若し引受けなければ、自分も『ポケット』の編輯を引き受けられぬ」と、がんばつた。この一事をもつても、若冠の、そして無名な、大佛次郎が、いかに鈴木德太郎に惚れ込まれてゐたかゞ判るであらう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com